

れ、都市の飢餓は戦争に関連すると指摘しているのです。これらの見解もあわせて論じていただければ幸いです。

報 告

「都市と王権をめぐって」

古代エジプトの場合―新王国時代の都市を中心として―

考古学専修 近藤 二郎

古代エジプトでは、都市を表すヒエログリフ（聖刻文字）は *nwt*（あるいは *nwt*）と呼ばれ、円形の枠の内部に交差する二つの大通りを描いた文字となっている。この文字から判断して、古代エジプトでは当初、「都市」は周壁を持つ構造であったことが想起される。このことは先王朝時代末期の「都市のパレット」の図像などからも支持される。本報告では、先ずナイル川流域の主要拠点都市の変遷を先王朝時代末期から末期王朝時代に至るまで時代順に概観してみた。その結果、エジプトにおいては国土が南北に細長いこともあり、先王朝時代末期から南北に二つの中心拠点が形成されていた。特に中王国時代以降、こうした二大中心拠点都市は、北のメンフィスと南のテーベとに収斂されていたのである。

また、北のデルタ地帯では、エジプトの対外関係により、中王国、新王国、そして第三中間期までは、東デルタのテル・アル・ダバア、

平成一八年度早稲田大学史学会大会報告

ペル・ラメセス（ピラムセス）、タニスなどの拠点都市が位置していたが、末期王朝時代の第二六王朝時代になると王都サイスをはじめ、ギリシア植民市のナウクラテス、プトレマイオス朝の都アレクサンドリアなど主要な都市は西デルタに位置するようになった。エジプトの対外戦略が西アジアからギリシア・ローマ世界へと変化していったことに起因している。

報告では、都市の具体的な例として、新王国時代の三つの都市（テーベ、マルカタ王宮、アマルナ王宮）を取り上げ、それぞれの都市について詳しく述べることで、エジプトの都市の持つ歴史的背景や王権との関わりを具体的に提示した。

最初に紹介したテーベは、上エジプト第四ノモスの拠点都市であり、ナイル川の兩岸をその領域としている。テーベにおける都市は、前述した周壁のある都市ではなく、この地の神殿の配置が極めて計算されたもので、特に王権と関連する二つの祭礼によって規定されていることを明らかにした。即ち、ナイル川東岸には、北にアメン神の聖地であるカルナクのアメン大神殿が位置し、南にはアメン大神殿の副殿であるルクソール神殿が位置している。これら二つの神殿は、新王国時代最大の祭礼であった「オペト祭」において、神官が担ぐ聖船の神輿が往復した。カルナクのアメン神が、ルクソール神殿に妻であるムウト女神を訪ねるもので、ナイルの氾濫と豊穡とも関連するものであった。東岸のカルナクとナイル川を挟んで対峙した位置にディール・アル・バハリ神殿があり、さらにその延長上

に王家の谷が位置している。一方、南ではルクソール神殿と対峙してマディーナト・ハーブ神殿があり、さらに延長上には王妃の谷が位置づけられている。カルナクとディール・アル・バハリを結んで、中王国時代から「谷の祭」という祭礼が行われている。このように、テーベでは、主要な祭礼が都市の四辺を構成するものとなっていることは注目に値する。

マルカタ王宮は、第一八王朝のアメンヘテプ三世が王のセド祭（王位更新祭）のために造営した王宮である。古代名をペルハイ（「喜びの家」の意）と称した。当初、ナイル川東岸にも大池を持つ巨大な祝祭都市として計画されたが、最終的にはナイル川西岸を中心として設置された。発掘された王宮のプランから最低二度の設計変更があったことが判明している。マルカタ王宮は、生活都市としてよりも明らかに祝祭のために築かれた都市であり、祝祭に合わせ建物群が整然と配置されている。

マルカタ王宮とはほぼ同時代のアマルナ王宮は、アメンヘテプ三世の息子で後継者のアメンヘテプ四世（後のアクエンアテン王）により造営された王宮である。古代名をアケト・アテン（「アテンの地平線」の意）と称する。アマルナ王宮の位置は、古代エジプトの二大中心拠点都市であるメンフィスとテーベとのちょうど中央に位置している。これはアテン神を唯一神とする宗教改革を断行する際に、新都を二大拠点都市から等距離にあたる中央に置くことで二つの都市の力を相殺させ、両都市からの影響が最小限になるように計画さ

れたものであった。またアマルナ王宮は、当初、明確な都市計画下で着工された。都市の中央部にアテン大神殿を配し、北に北王宮と北市街を持ち、一方、南はコム・アル・ナナが位置し、南北を一本の直線道路で結ぶものであった。しかしながら、造営が進むとアテン大神殿の北側では、計画とおりの建設が行われたにも関わらず、南側では次第に自然地形の影響を受け、市街は計画よりも西側に拡張され、ナイル川の流路にあわせる形で建設が行われた。このようにアマルナ王宮は、マルカタ王宮とは大きく異なり生活の痕跡が色濃く残されている。このようにエジプト新王国時代の三つの都市を比較することで、周壁で囲まれた西アジアの都市とは大きく異なる構造を古代エジプトの都市が有していることを明らかにしたのである。

イスラームの場合 ―バグダードとカイロ―

東洋史学専修 佐藤 次高

イスラーム世界では、都市はマディーナ (madina) 、バラド (balad) 、あるいはミスル (misr) などの語で呼ばれる。また王権とカリフ権の用語法についていえば、両者は区別して論じられることもあるが、ここではカリフ権もスルタン権もともに「王権」とみなして議論することにした。カリフは預言者ムハンマドがもっていた宗教的な権限と政治的な権限のうち、政治的な権限だけを継承し、この